

保育効果の調査

(第二報告)

愛育研究所 多田淑子

村山貞雄

幼稚園や保育所における教育の効果は、子どもが小学校に就学した後、どのようにあらわれるだろうか。

このことを考える一つの方法として、卒園児童を、幼稚園や保育所を経てこなかった児童と比較して、そのあいだにあらわれる差をしらべてみた。

小学校には、幼稚園を経てきた子ども(卒園児童)と家庭からすぐに就学してきた子ども(不就園児童)という二種類の過去をもつ子どもがいるわけであるが、このあいだにはっきりした差を示すような内容がみられるだろうか。またこの差のなかには、保育の弊害というようなものがあらわれていないだろうか。また、入学してまもない一年生の頃には、社会性などで明瞭な差があらわれているとしても、小学校を卒業する頃になると、幼稚園を出てきた子どもと出てこなかった子どもとのあいだに差が全然なくなってしまうのだろうか。

以上のようなことを知る目的で、この調査をおこなった。

その結果、教科では、国語と算数に保育効果が非常にあら

われており、また体育にも保育効果が非常にあらわれていた。また算数と社会にも保育効果がかなりあらわれており、理科にも少しあらわれていた。

つぎに態度や性格などについてみると、(1)個性が強いこと、(2)遊びの場面に創造性があること、(3)ことばづかいがよいこと、(4)身のまわりのことが一人でよく出来ること、(5)人の世話をよくすること、(6)こまかいところによく気がつくこと、(7)態度がまじめであること、(8)劣等感を感じていないことが、卒園児と不就園児のあいだに、一年生のときに1%以下の危険率で差があらわれ、五年のときには有意差があらわれないものとしてあげられた。このように「狭的なもの」は高学年では差が少なくなっていたが、(1)手先が器用であるとか、(2)学習場面に創造性があるとか、(3)画材や作文の内容がゆたかであるとか、(4)競争意識があるとかいうように「学習的なもの」は、五年生のときも5%から1%の危険率で差が残っている。

また、弊害として、虚栄心が強いということと、うぬぼれが強いということがあらわれているが、先生をばかにすることがあるとか、人のおせっかいはする傾向があるというようなことはあらわれていない。

ジャン・ポールの

幼児教育論

広島大学大学院

丸尾

譲

ジャン・ポール(一七六三—一八二五)はドイツ新人文主義の文
学者でかつ教育思想家である。彼は最初神学を修めたが、のち文学に
志した。その間、生活のために家庭教師をしたり、小さな学校を經營
するなどして熱心に實際教育の経験をつんだ。このことがのちに
なって教育説をうちたてる上に大いに役立った。彼の幼児教育論は彼
の教育的著作「レバーナ、一名教育論」において展開されている。

彼によると、教育の目的は子どもの中に内在する理想人を自由に
發展させることにあるという。彼のいう理想人とは身体的、精神的
に調和的發展をとげた人のことである。この理想人は子どもの生ま
れる時、すでにその中に固く秘められている。この硬い殻を除いて
いくことが教育である。したがって彼は「人間の教育は子どもが生
まれ落ちると同時に始めても決して早過ぎはしない」と主張するの
である。そして幼児期の教育は理想人の基礎をつくるものであるか
ら、子どもの内にある感覺的、身体的諸力の調和的發展に重点がお
かれる。しかもこれは子どもが自分で發達させるものと考えるので
ある。このために遊戯の持つ意味が重視される。彼は子どものよろ
こびを快樂と歡喜に分け、前者をさけて後者をあたえるようにせよ
という。なぜなら快樂は消極的なよろこびであり、歡喜は積極的、
創造的なよろこびだからである。遊戯は「人類最初の詩」であり、
また、子どものまじめな活動の表現である。この活動がたえず歡喜
を創造し、維持していくのである。子どもは遊戯をすることによ
り、感覺的、身体的な諸能力を發達させ、生命にみちみちた美しい
想像力を養い、また他の子どもとの遊戯によって社会的な情操を養
うのである。かくてジャン・ポールは、子どもの遊戯と自發性を尊重
し、おとなの干渉をさけて、子どもの自由な活動による諸能力の調和
的發達こそ幼児期の教育にもっとも大切であるというのである。

園児の超自我領域への

両親の影響

名古屋市立保育短期大学 甲斐久生

同 右 成田錠一

名古屋・上古屋保育園 石田妙子

フロイドによれば超自我とは自我領域から社会的規範、拘束によ
って作り出された自我理想と無意識的良心より成るものと考えられ
る。具体的に云えば、罪を犯した場合に罰せられるという恐れ、後
悔の恐れである。今幼児の超自我を考えると、幼児は主として両親
を理想とし、両親との同一視の結果形成されるということが出来
る。本研究はこのような幼児の超自我の形成に与える両親の有無の
影響を投影テストを用いて明らかにしようとする。

〔被験者〕I、Q85以上で両親健在の園児及び両親のいない園児、
施設児各22名(5~6才)

〔方法〕P、F、T及びC、A、Tを個別的に実施

〔処理手続〕(1)P、F、Tの24の欲求不満場面中、負わされた罪の
責任の否認反応(E)「罪は一応認めるが環境に言及して本質的には失
敗を認めない反応(I)更に發達による上昇が予想されるI+Eを
全反応との比率により両群の幼児の超自我の内容及びその差を明ら
かにする。(2)C、A、Tの10テスト場面中幼児がその犯した罪に対